

日本と諸外国とのマナーの比較
—— 文化のギャップがビジネスに及ぼす影響 ——

Comparison of Japanese and international manners
— Impact of different cultures on international business relations —

儀 賀 美 智 子*
Michiko GIGA

Abstract

The essence of etiquette lies in an individual's thoughtfulness towards others, which is expressed in the form of manners. Manners are exercised based on an individual's will, that is not, by any means, to be enforced by laws or through coercion. Just as it is common sense to wear clothes in public, we should practice manners and etiquette on a daily basis in order for all of us in a society to live in harmony. The word etiquette was introduced to Japan after World War II. Contrary to general belief, the word is not English, but is of French origin and first appeared in 1387 A.D. The term was originally used to describe a placard that would guide guests visiting the French royal courts. The word transformed over time to encapsulate all acts of being considerate towards others. That is the meaning of the word etiquette that we know today. Reigisahou (rei-gi-sa-ho) is the Japanese word for etiquette, and also has its origin in courtly manners. Modern manners come from a hierarchical society that has created an order of ranks, and instilled a sense of respect towards the higher ranked individuals. It is necessary for the Japanese people who play an active role in this modern international society to understand the differences in manners among various cultures in and outside of Japan. We will investigate the different manners around the world by taking an in-depth look at their cultures and comparing them.

Keyword: 日本の礼儀作法 (Japanese etiquette / Reigisahou), 国際儀礼 (International etiquette), マナーの形 (The forms of Manners), 文化のギャップ (Cultural differences), 心のマナー (Manners from the heart)

*本学非常勤講師、ホスピタリティー・マナー、サービス・マナー (Hospitality Manner, Service Manner)

1. はじめに

日本の礼儀作法は、皇室の「宮中儀式」からはじまったものである。鎌倉時代、武家が政権をとり、「宮中礼法」が武家社会に合わなくなった。室町幕府になってから「武家礼式」が整備されることとなり、その後、江戸幕府で「武家礼法」を完成させたのである。明治13年に、学校教育の中に取り入れられ、言葉も「礼儀作法」となり、現在まで受け継がれて来たのである。しかし現在では、「礼儀作法」の言葉だけで、「古くさい」「堅苦しい」と敬遠されているのが現状である。日本の「礼儀作法」や、インターナショナルな「国際儀礼」は形だけにとられることが重要視されているように思われるが、エチケットになかったマナーは、心がともなう自然な動作として 回りの者を心地よくさせるものである。マナー教育は、一夜漬けで覚えられるものではなく、常に意識を持ち、心がけ、習慣性として身につけるものである。形だけにとられた立居振舞は不自然なもので、時には周囲の人に不愉快な思いをさせてしまうことがある。しかしながら、「形に心が宿る」というように、形式としての動作も大切なもので、たとえどんなに敬愛の心を持っていても、目に見える表現をしなければ相手に伝わらないのである。また「一般作法」「礼儀作法」「服装の常識」「言葉使いの常識」などを考える場合の大事なことは、T(時)・P(場所)・O(場合)をわきまえるということである。各国の文化のギャップからくるマナーの違いを、いろいろな角度から比較し、ビジネスなどに及ぼす影響があるかを調べ、報告する。

2. 起居動作

挨拶は、マナーの中で最初に起こす大事な基本動作である。ビジネスの場合、特に挨拶の必要性を考えなくてはならない。最初に交わす挨拶の方法は、国によってかなり違いがあり、さまざまな形がある。その国の風土、風習、習慣、宗教によって違いが大きい。日本の場合は建造物の影響を大きく受けている。それは、日本特有の「正座」をして行う挨拶「座礼」である。

日本の建物の構造上、履物を脱いで上がる生活習慣があり、「座礼」はその動作の代表的なものであるが、外国人から見ると、日本の「座礼」は異色な動作に見えるようだ。昔から腰かける生活習慣の外国人にとって、日本訪問の際の「正座」は困難なことであろう。

(1)世界の挨拶の方法

表-1 世界の挨拶

挨拶の方法	国名	内容
握手	世界共通	ビジネス、プライベート、さまざまな場所で交わされる。
鼻こすり	イヌイット	互いに鼻と鼻をこすりあう。 親愛の情を表す。
	フィンランド (サミー族)	
	北アフリカ アラブ	
	ニュージーランド ド (マオリ族)	友情をこめた歓迎、尊敬を表した挨拶。
頬にキス	アメリカ	友人や家族は抱き合って挨拶。
	ヨーロッパ	アメリカ式マナーはヨーロッパ式マナーの影響が大きい、現在は握手が一般的。
さする	南アメリカ	ワイカ・インディアンは、両手で相手の頬や胸をさすり、頬ずりをする。
抱き合って背中を叩き合う。	ラテンアメリカ	身振りを大きく挨拶する。 スペイン、イタリアでもよく見られる。
胸に手のひら	マレーシア	胸の中央に右手をあてて恭順、親愛の気持ちをあらわして握手する。
	イラク	ベールを被った女性に対して、右手を左胸にあてる。 ベールを被っていない女性に対しては握手する。
手のひらを合わせる	インド	年長者、目上の人に対して顔に近い胸元で手のひらを合わせる。客人は身をかがめて手を合わせる。
	タイ	
抱き合う	ロシア	ギュッと抱き合って挨拶する。
手の甲を額に	セネガル	ウオロク族は、目上の人に会うと、身を屈めて相手の右手首を持って自分の額にあてる。
タンザニア	屈んで拍子	トングエ族は目上の人に会うと、屈んで拍子する。 目を相手からそらせる。
相手の手に唾	東アフリカ	キクユ族は「幸運がありますように」と願って、相手の手のひらに唾を吐く。特別な相手にまじないを

		かける気持ちで行う。
立礼と座礼	韓国	正式な時改まった時に行う感謝と尊敬の挨拶。 立って両手を額に重ねるように当て、手をおいた状態で座礼。額を床につける。それを数回繰り返す。 女性は座る時に左足は胡座、右足は立て膝にする。

表-2 日本の挨拶

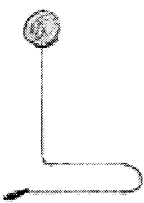
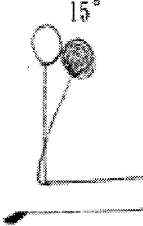
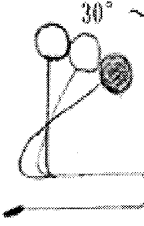
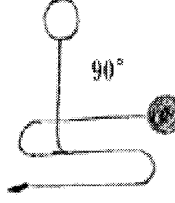
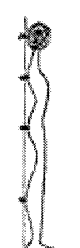

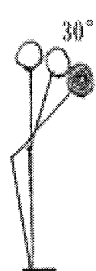
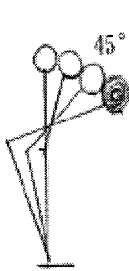
お辞儀 (形が決まっている)	日 本	1) 座礼				
			正座	会釈	敬礼	最敬礼
		2) 立礼				
			正しい姿勢	会釈	敬礼	最敬礼
1) 2) ともに場所、場合によって使い分けられる。						

表1を見て解るように、挨拶の動作は国によってかなりの違いがある。日常マナーとしての「挨拶」と、ビジネスで対応する「挨拶」ではかなり違いがある。「日常」の場合は、まわりを取りまく環境、風習、習慣、宗教などの影響を大きく受けて行われているが、ビジネスの場合、国籍、相手に対しての敬意、思想、性別、年齢などを考慮しなければならない。日本の「挨拶」は、表2のように、お辞儀の角度から、手の動きにまでも基本的な「形」がある。世界の国々から見ると大変窮屈なものに見えるらしく、時に滑稽にさえ映ってしまうようだ。しかしながらその反面、日本民族の立居振舞いの美しさ、礼儀正しさの評価もまたこのあたりにあると思われる。形式としての動作も「心のマナー」として、相手に対しての敬意、思いやりをもって接すれば、形の上でのマナーのギャップを越えて

良い印象として映ることであろう。

(2) 名刺交換

名刺は、一般的日常生活の中ではほとんど必要ないものであり、持っていない人の方が多いものであるが、ビジネス社会では、名刺の活用はビジネスチャンスの始まりであり、道具でもある。しかし日本人のように会えばすぐに名刺を出す習慣は、諸外国ではほとんどみられない。まず、挨拶を交わして会話が弾む、そうした流れのなかで、「再度会う」「後日連絡する」などの状況になってはじめて、名刺交換となるのが一般的である。

表-3 日本と諸外国との名刺交換の違い

日 本	諸 外 国
挨拶<お辞儀> → 名刺を出して自己紹介	挨拶<握手> → 口頭で自己紹介

また、日本人の名刺ほどユニークで、自己PRのために作られたものは、他の国ではあまり見られない。しかし、日本国内でビジネスを展開する場合には、名刺の効力を100%活用したいものである。表4を見て解るように、名刺交換は相手に対して敬意を表す大事な手段である。日本の「日常マナー」「ビジネスマナー」の指導書の多くには、名刺の受け渡しに関する心得が多く述べられており、そのほとんどは理に適っているので覚えて身につけた方が良いと考える。何故なら、名刺交換の習慣のない国の人であっても、その必要性があれば通用することであるし、日本のビジネス社会における自己紹介の一つの形として、自然な行為と知ってもらえるのもいいことだと思う。ただしそれは、強制されて行うものではないことを常に意識しなければならない。

表-4 日本の名刺交換の心得

名刺を渡す	名刺を受ける
<ul style="list-style-type: none"> ・立ち上がって渡す。 ・手から手へ渡す。 ・自分を名乗りながら渡す。 ・相手の方向にして右手で親指と人差し指ではさみ直角を持って渡す。 ・相手より先に渡す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・両手で、文字が隠れないように受け取る。 ・声を出して、会社名、名前を確認する。 ・相手の氏名を覚えてから名刺入れしなう。 テーブルがある場合は机の右側に置く。

3. 日常の行動

① 交際のエチケット

交通ルールは、国によってかなり違いがある。例えば日本の車社会においては、人は右、

車は左と決められているが、諸外国ではその逆が多く、日本以外で車に乗り運転する場合は「国際免許」を取得しなければならない。マナーもそれと同じような感覚で行うものである。文化の違いがあっても、「その国のルールに従う行動」こそが大切である。マナーは、思いやりの心で行動することであるから、一般的な基本内容は、何処の国も同じであると思われるが、文化の違いから生じるマナーのギャップを埋めるには、やはり努力することが必要である。

1) ビジネス・プライベート

ビジネスでもプライベートであっても、社会人としてのマナーは最小限身につけておかなければ「損」をすることと言ってもよい。礼儀正しい人は、周囲に対して「感じの良い人」と映り、それが信頼感、安心感へとつながり、大きなチャンスをつかむ可能性をも秘めている。外国人に比べると日本人は平均的に「自然な笑顔が少ない」「親しみやすい会話が苦手」のようでもある。「表現力」に温かみを感じないのも、自然な笑顔が苦手であるからであろう。日本人の得意とするのは「社交辞令」の笑顔であるように思える。特に、人と人との関わるビジネスの場合には、苦手なところを克服していかなければならないであろう。日本人同士の場合には、長い間の習慣で当たり前になっていることも、外国人との場合では、誤解が生じるなどのマイナス面が多いことを忘れてはならない。特にビジネスに関しては、エチケットに適ったマナーを身につけることは、誰のためでもなく常識的に重要且つ不可欠なものであり、ひいては自分自身の「ステータス」をあげることになる。外国に旅をすると、初めて会うその国の人々と視線があった時、先ず、相手の「笑顔」でホッとさせられることがよくある。誰でも好むと好まざるにかかわらず、相手に対して思いやりの笑顔がその場の雰囲気をも明るく、快適な状態をつくり出すのである。

2) 順位

人は、さまざまな人間関係の中で社会生活を営んでいる。そのなかで「生活」「仕事」を円滑にするためには、お互いのプライバシーを守り、周りの人々に迷惑をかけることが大事である。

ビジネスにおいては、どうしても守らなければならないルールがある。それは組織の中での「順位のマナー」である。プライベートにも順位があるが、日本では昔から「親しき仲にも礼儀有り」ということわざがある。それは親しい人を思いやる心、そしてお互いを尊重し合いながらもその領域を侵さない、という配慮の気持ちから生まれた言葉である。

道路を歩く時の状況を図で見よう。「道路の上座は中央」となることを覚えておこう。

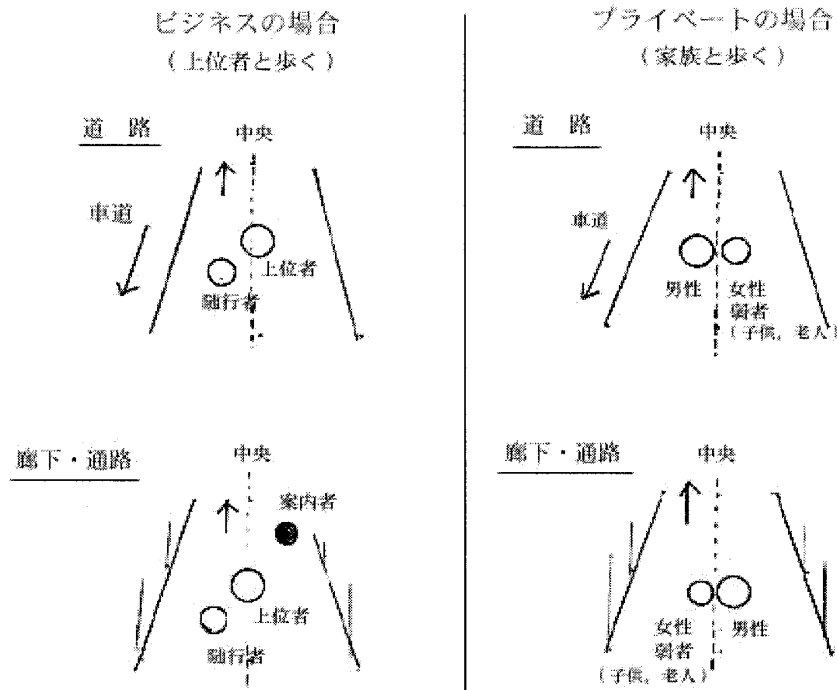


図-1

図1から、ビジネスとプライベートでは、その順位の決め方の「心」が違うことが読み取れると思う。また、危険が生じる状況と無い場合とでも違いがあることが理解出来る。これらも「心のマナー」として、相手に対しての「敬意」「思いやり」の気持ちからの行動であり、世界共通のマナーではないだろうか。人と人との交わりの中での、最小限の常識の範疇でもある。

②音の合図 -ノック-

部屋に入る時、「ノック」をする。ノックは無言の音の合図であることを、誰もが知っている世界共通の行為である。合図の行為は色々あるが、言葉やジェスチャー、離れた所への伝達手段である「のろし」、そして音の合図。この音の合図は、形が見えない状態で行うものであるから厄介である。ノックを行う位置、叩く早さ、強さによって音の違いがあり、相手に与える影響もさまざまである。右手を軽く拳にして、肩の高さの位置で、行う。中に居る人は、相手の姿が見えなくても、相手の身長の高低がわかる。その為、ドアを開けて入室する相手に対して、自然に目視線を合わせることが出来る。ノックを叩く速さ、強

さで、見えない相手の心理状態までも想像してしまうほどである。ドアを叩くノックの仕方によってさまざまな影響が考えられる。ノックの回数は、平均して2回行うが「トントン」と速く叩いた場合は急き立てられているよう感じる。また、「トーン、トーン」とゆっくりの場合には、何だろうと気後れしてしまう。当然、入って来る相手の顔をも不信な面持ちで見えてしまうであろう。最も自然に感じる速さは、心音のリズムと考えられる。日本式の家屋では、ノックの行動を起こす所はかなり少ないが、諸外国の場合は日常頻繁に行わなければならない。そのため、ノックの習慣のない日本人にとって、その必要性と重要性「正しいノックの仕方」を理解しておくことは大切である。

③起立の習慣

欧米に比べて、日本は起立の意識が非常に薄い。日本の場合の起立をする意味と欧米のそれとを比べるとかなりの違いがある。昔から欧米では、起立をすることは、相手に対しての敬意と、女性を優位に扱う気持ち、また年配者に対しての労りなどの表われである。それに対して日本人が行う起立は、相手が地位の高い人、またはビジネス上で取引があり世話になっている人に対して起立をしてお辞儀をするというものである。前項でも述べているがそれは敬う心と感謝の念からの行動である。欧米の場合とその意味は異なるが「心のマナー」としての共通性を感じる。また欧米での起立は男性の行動であって、女性は行わないのが常識であるが、日本の場合は、男性も女性も同じように行っている。夫婦の関係で着席している時などは、夫が立ち上がると、自然に妻も立ち上がり、相手に対して「お辞儀」を行っている。これも昔からの習慣である。最近では国際的な意識も高くなり、日本男性も自然な行動で起立をしている場面を目にすることがある。おそらく、エグゼクティブマナーを身につけている人であろう。そのような行動が自然に出来る男性は、姿勢、立居振舞、服装などもマナーに適っており、それは大変良い傾向である。

「レディー・ファースト」という言葉は、中世の騎士の間で生まれた言葉である。それは「女性を労りかばうこと」として、「女性を優位に扱う」という意味である。欧米と日本とでは、「女性に対するマナー」の意識が根本的に違っている。女性が同席する場合には、女性が入室する、腰掛けていて立ち上がるなどの場合、男性は即座に起立する。地位・身分に関わらず同じであることに感動する。日本人にとっては慣れない習慣であるから、ついすっかり忘れてしまい、外国の男性が行動を起こした時に慌てて立ち上がる姿は、少々滑稽な感じさえする。欧米の男性のこのような行動は、特別なマナー教育を受けたわけではなく、幼き頃から、両親や先輩達の行動を見て自然に身についた習慣としてのマナーと考えられる。

④公共のエチケット

自宅を出、会社を出たら、それぞれの社会組織から離れて「街の人」となる。誰もが利用する公共の場である。当たり前のことであるが、歩道があれば人は歩道を歩かなければならない。しかし、それすら守れない者もいる。展覧会場、公園、図書館、駅のホームなどでは、「芝生の中に入るな」という立て札、図書館では「静かに」、駅のホームでは「割り込み禁止」展覧会場では「触るな」などのルールがたくさんあるが、それらを守れない人も大勢いることを考えなければならない。特に日本人に多い傾向である。単独では行わないが、複数行動している場合によく見受けられる。日本人の悪い習慣的なものであり、恥ずかしいことである。決して日本人だけの行動ではないが、特に日本人に多く見られるのが残念なことである。ビジネス社会では、どんな場合でも「知らなかった」という言い訳では許されないことが多く、時には大きな間違いを引き起こす要因となる。ルールは守るためにつくられているもので、破るためのものではないことを誰もが認識する必要がある。時代の流れで、現代では持つのが常識となってしまった携帯電話のエチケットが、あまりにも悪過ぎるのではないかと思う。特に病院では、電源を切らなければいけないが、ほとんどの人が守っていないように思われる。マナーは、その人の考え方で行われるものであるから、徹底出来ないのが現状であろう。

4. 服装

T (time)、P (place)、O (occasion) を考えて、F (formal)、O (Official)、P (private) に服装を選ぶことが大切であって、それが服装のマナーである。これもまた日本人は苦手のようなのだ。そのためにマイナスになっている場合がある。服装はその人の人柄をも左右してしまうほど強い役割を果たすこともある。初対面の者同士は、お互いのことが何も分からないのであるから、まず表面的な状態で判断せざるを得ない場合がある。相手の常識やセンスなどを読み取る手段となり、ファースト・インプレッションとして強く心に残るかもしれない。服装が、そのような役割を果たすことを意識し、特に初対面時には、エチケットに適った服装をするよう心がけたいものである。日本の服装は「四季」による影響が大きいですが、諸外国では「一日」の時間帯で服装が左右されている。日本人が外国に行く時に気をつけたいのは、四季感よりも時間帯と目的に則した衣裳を用意して行くことである。特に女性の場合は夜のパーティーなどで着る服装には、宝石の知識も身につけておかなければいけない。光沢のある宝石類は、夜のライトと月明かりの中で使用するのが常識であるが、光沢のない宝石類は昼間に身につけるものであることを覚えておくと便利だ。

①常識

服装は、自分が満足して着ることは当然であるが、周りの人達とのバランスを考えることも大切である。服装のマナーは、常識的なことも多く、社会生活において身につけておくべきことのひとつである。例えば一般的によく知られているマナーとして、結婚式に出席する場合、主役である花嫁より派手な服装をしないことが常識とされている。そのように、マナーを越えて、人間としての常識の範疇となっていることがあることを覚えておきたい。前項でも述べたように、T. P. O. によって、服装の「格」を考えて決めなければならない。送られてくるパーティーの招待状に服装の指定が書かれていることがある。ドレスコードと言われるものである。「ホワイトタイ」「ブラックタイ」「インフォーマル」「平服」などと書かれている。例えば「インフォーマル」の場合、男性は「ダークスーツ」または「ブラックスーツ」。女性は、昼間なら「アフタヌーンドレス」、夜なら「カクテルドレス」ということになる。そしてこの中で一番困るのが「平服」の場合ではないだろうか。「平服」を「普段着」と勘違いをする人が多いが、それは大変相手に対して失礼なことである。「平服」の場合には、男性なら「ビジネススーツ」、女性なら「ツーピース」「ドレス」などの、ちょっとお洒落をする感覚で出席することが常識である。

②衣更

四季のある日本では「衣更」の時期が春夏秋冬で明確であり、習慣となっている。日常服の衣更の時期は幅をもったゆとりがあるが、学校の制服、警察官などの服装は、温度差に関わらず、6月1日～9月30日までの4ヵ月間を夏服着用とし、10月1日から翌年の5月30日までが冬服着用と決まっている。また、日本の民族衣裳である着物の衣更は、デザインは季節に関係無くすべて同じであるが「素材」に大きな違いがある。

表-5 着物の衣更

時 期	素 材
6月 ～ 9月	単衣（冬物の素材を単衣で着る） 帯、小物類は夏物を使用
7月 8月	盛夏用（薄物）： 絹、紗、麻 など 帯、小物類は夏物を使用
10月 ～ 翌年5月	袷の着物 帯、小物類は冬物を使用

現在では、地球温暖化の影響で、長い間続いてきた「衣更の時期」もその気温に応じて変わりつつあるようだが、まだまだ伝統的な習慣が受け継がれているように感じられる。衣

更の直前に、暑い日差しの下でその時期の衣裳を身につけて汗を拭く姿は、忍耐強いと言うより外国人から見たら滑稽にさえ見えることだろう。日本社会の制服の衣更は、まだまだ融通がきかないようだ

5. 日本と欧米の「冠婚葬祭」

①日本の東西の衣裳文化

諸外国の間で「冠婚葬祭」ほど文化のギャップが大きいものは無いと考えられる。それぞれの国の宗教に左右されて行うものがほとんどであるが、日本の国の場合を考えた時、地方によってもかなり違いがある。東は東京を中心にして、西は大阪、京都を中心と考えられている。日常の会話の中で和装について話す時も「東の方では」「西の方では」という言い方をする。日本では、和服に限って「関東風」「関西風」と衣裳文化の違いの表現をする。その地方の気候に大きく左右されているものであるが、やはりその地方の文化、風習、習慣によってさまざまな違いがあるようだ。例えば、着物の下に着用する「長襦袢」は、東西で「衿の仕立」に違いがあり、着方も異なる。「関東仕立」では「本長襦袢仕立」といい「関西仕立」では「別衿仕立」という。着方も関東では、衿元を開けぎみで着付けするが、西の京都では衿元を詰めて着付けされている。しかし、伝統的と思われる和装の世界でも、現代ではほとんど東西の区別は無くなり、個性を生かす「ファッション性」を重視した衣裳文化へと変わりつつある。女性の喪服の素材も関東では「羽二重」、関西は「縮緬」で加工されてきたが、最近では関西風の「縮緬」が大部分を占めている。

②慶弔の着付け

日本の着物の着方は、左身頃を右側にもって行って着ることが常識であるが、この左前に着ることの歴史は、大変古くからの習慣である。その歴史は、養老3年(719年)、すべての民に対して「左衿を上に合わせて」との衣服礼が出されたことにはじまる。この他にも、日本の民族衣裳である「着物」には、長い歴史の中、政治的、地方の風習、習慣によって形成された多くの「決まりごと」があり、現在まで伝承されている。日本の民族衣裳ほど、歴史的背景の影響を受け、守られてきた衣裳文化は、世界で類を見ないであろう。この項のはじめにも述べたように左身頃を右側にもって行って着装するのが常識であるが、それは生きている時の着方であって死者に対してはそれを反対に着装し「納棺」をする習わしとなっている。帯の結び方でも「慶弔」で違いがある。慶事の際には「二重太鼓」を結ぶ。それは後ろの太鼓部分が二重になることで、喜び事が重なりますようにとの願いを込める意味である。弔事の際は、後ろの太鼓部分が一枚になるように結ぶ、悲しみはもうこれきりで、重なりませんようにという意味を込めて結ぶことが決まりとなっている。また、帯

を締める帯の結び方も慶弔では正反対となり、慶事では帯の両サイドの先を上になるように始末する。これは、両手をあげて「バンザイ」の意味である。弔事では両サイドの先を下に向け始末する。これは涙が落ちる「悔」の意味である。これらの決まりごとは着装のマナーであるが、現在では自然なこととして常識とされている。

6. 図柄の対比

図柄には、日本で縁起が良いとされていても、国によっては「不吉」とされ嫌われているものがある。「知らなかった」では済まされない場合があり注意しなければいけない。

表-6 主な図柄の意味(日本以外)

項 目	国 名	意 味
松の木	中国	棺桶の材料になっている
菊の花	ラテン系	悲しみの花
カラス	中近東の一部	神の使者として崇める
亀	中国	悪魔
鶴	北欧	不吉

日本の「松」に対する考えは、中国とはかなりの違いがある。日本でも、出棺をする際に松の木を一枝、棺の上に乗せて送り出すという風習が地方によってはまだ残っているようだが、その意味は、旅立つ死者は誰かを「待つ」といわれるため、その身代わりに「松」の木一枝を棺に乗せるというものであり、中国のように「松」の図柄を避けるということとは決してない。枝ぶりの形が良いため、日本庭園や、能舞台の正面に描かれる図柄として欠かせない存在である。「菊」の花は、日本の皇室の「菊の御紋章」として使われているが、ラテン系の間では悲しみの花として敬遠されているので、図柄や物品など贈り物として使用しない方がよい。日本でも、葬儀の祭壇の飾り花として、納棺の際に中に入れる花として使用されている。それは恐らく、菊の花は際立って香りが強いいため使用されているのではないかと考えられる。日本では、菊の花は慶弔に関わらず冠婚葬祭で使用しているように感じる。また、日本の着物には菊の柄が多く描かれていることを覚えておく必要がある。何故かといえばラテン系の国をビジネスで訪問した時などは、菊の柄の衣裳は避けた方がよいと思われるからだ。「カラス」は、日本では何かにつけて厄介な鳥として嫌われている。地方によってはカラスがたくさん集まって一斉に鳴き、飛び立つと人が亡くなると言われているぐらい、不吉な出来事の象徴となっているように思う。「亀」は、中国では悪魔と呼

ばれているが、日本では「長寿」の意味を指して縁起の良い生き物とされている。「鶴」も縁起の良い鳥として好まれている。こうしてみると、図柄には日本と諸外国とではまったく反対の意味を持つことが多くあるので、各国を訪問する際には、その国の文化、風習、習慣を勉強して知識を得る努力をすることが必要である。特にビジネスでの関わりには、慎重さが要される場所である。

7. 贈り物

「贈り物の常識」、その難しさは誰もが感じていることである。どこの国でも「贈り物」の習慣はあるが、日本ほどやたらと贈り物をする習慣のある国は無いであろう。その内容は多種多様であり、なかには「何故頂くのか解らない」などということもあるようだ。夏の中元、冬の歳暮は、感謝の気持ちを表現するために行われている日本だけの習慣であるが、外国人から見ると大変不思議な習慣にみえるらしい。＜贈り物ビジネス＞が盛んなこともまた、日本人らしいと言えるのではないだろうか。一般家庭の場合は別にしてビジネス間で行われることは、互いのPR合戦の手段であり、商取引の手段でもある。また、日本には「御祝」などお金を贈る習慣があるが、日本特有のものであり、外国では見られない。外国で同じような行為をすると大変な結果を招くことがある。何故なら「お金を贈る」という行為は外国では困っている人に「恵む」ということであり、それは相手に大変失礼な行為となる場合があり、注意しなくてはいけない。また、外国へ贈り物をする際気をつけなければならないことは「気候」である。例えば、日本の伝統品である「漆器類」は、ヨーロッパなど中近東では湿度の関係で割れてしまうことがある。贈り物をする行為は、その目的とタイミングを十分に考慮して行わなければ受け取る側に不信感を持たせてしまう結果になる。まして、文化や風習の違う外国人への贈り物は、より一層考慮することが必要と思われる。

8. 結び

日本の文化、風習、習慣から生まれたマナーを正しく知ることが、諸外国のマナーを理解し、それぞれを比較するための第一歩であると考えている。本来なら「衣」「食」「住」すべての観点から比較しなければ、マナーのギャップを知ることは出来ないが、膨大な量となるため、ここではまず「衣」と「住」の起居動作にかかわる「一般常識マナー」の一部を調べて考えをまとめてみた。それぞれの国同士、文化の妥協は出来ないが、その国のルールは、努力によって理解することが出来るし、また理解すべきことである。特にビジネスに関しては「相手国のルールを知らなかった」という言い訳は通用しないと思ってい

ではないか。その国のモラルを大切に受け止めることが、ビジネスをしていくうえで重要であることを認識したいものである。

文献

- 1)世界の挨拶 21世紀研究会編「常識の世界地図」文春新書刊より
ロータリークラブ カウンセラーハンドブック資料
- 2)田島淳之介 「現代の礼儀作法」エチケットの言葉の誕生の年号と意味 日本文芸社 (1967)
- 3)儀賀美智子；研究資料、体験資料